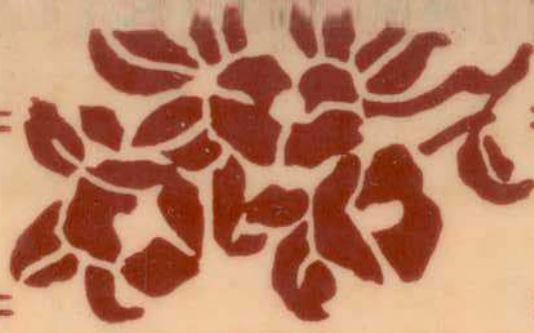




角川文庫
—1804—

荷車の歌

山代巴



角川書店



昭和二十八年十月十五日 初版發行
昭和四十五年二月二十日 三十五版發行

定價は、帯・カバー
に明記してあります

著作者

林・芙美子
はやし ふみこ

發行者

角川源義

庫 文 川 角
し め



印刷者

中内佐光

東京都千代田區飯田橋一ノ二

發行所

東京都千代田區富士見二ノ十三
①一〇二 ②東京一九五二〇八

株式會社 角川書店
かどかわしよてん

電話東京(265)七三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

曉印刷・多摩文庫

荷 車 の 歌

山 代 巴

角 川 文 庫

1804

くまごの話から

セキさんはもう七十六歳で、髪の毛はすっかり鉛色になっているが、子供のように無邪気なおばあさんで「三次は茗荷の子でかわばかり」と、川に包まれた三次の歌や「三次育ちは小鳥の育ち、栗やくまごで日をすごす」と、くまごで暮した頃の三次地方の歌を沢山知っていて、いい声で歌ってくれる人だ。

「おばあさん、くまごとはどんなもの」と聞くと、

「そうじゃのう、見たところは栗と同じようなもんじゃ、餅にはつけん栗よう、ねばりがないから。栗のようにこなれがようない。麦のように腹がへらん。麻を刈りとった跡へ蒔くとよう出来た。こういう風にのう、くまごとかぶらの種をいっしょに握って、バラッバラッと蒔くんじゃ」と、種を蒔くまねなどしながら、

「畑いっぱいに、くまごとかぶらが生えて来ると、百姓は二尺ぐらい幅を置いて、細い筋を立ててそれを間引く。間引いた苗はまばらに生えたところへ植えて、幅広い畝の畑にする。ときどき細い筋を足場にして肥をやり草を取る。くまごはずんずん背が高うなり、かぶらはその下で葉をひろげる。秋、くまごの穂はこがね色に色づいてくると、穂首がもろくなって、小鳥がとまっ

たぐらいいでも折れて落ちる。それに小鳥はくまごが大好きで、いっぱいよってくる。小鳥ばかりではない子供もよってくる。畑のほとりのくまごが、道へ向けて頭をたれてくると、子どもらはポンポンと、手の平をたてにして穂首の上を叩いて歩く。穂は首のところから折れて、ポタポタとみごとに落ちる。子どもらはそれがおもしろいから、叱られても叱られても道端の穂を叩いて歩く。百姓は学校の先生に願ひ出る。学校というても明治十八九年の学校は、先生が一人しかおらん。一人しかおらん先生は、仁王さんにおうのような顔をして、犯人を呼び出し、右の手の平は上へ向けさせ、その手のくぼみへ水を入れる。左手には火のついた蠟燭ろうそくをにぎらせる。蠟燭がとけて熱いのが親指の根元へ落ちると子どもらは思わず火を吹き消す。先生はそれを待ちうけて火をつける。熱いわ——こらえておくれ——と、いうひょうしに水がこぼれる。先生は水のこぼれた手の平へ水をいれる。それを十ぺんもくりかえすと、子供は震え上ってしまうのだが、叩いてくれといわぬばかりに首をたれたくまごの穂をみては、つい叩いてしまうのが子供だ。親が物持ちであつたり役持ちであつたりすると、先生も遠慮をするが、親のない子は人の分まで罰をうける。わしのつれそいの茂市さんもいちは、人の分まで罰をうけた子だ……」

といった調子で話してくれる。これから書くのは、このセキさんの若い日からの物語りである。

セキさんの夫になった茂市さんは、父親がなく、母親は炭焼の下働きなどして、ようやく暮しを立てていて、身よりが少なかったから、一度くまごの穂を叩いて歩くところをみつけれられてからは、身に覚えもないのに人の代りに罰ばかりうけたので、学校がいやになって、三年の秋から

学校をやめて、母親といっしょに炭を焼くようになった。今でこそ小学校を三年でやめる者はめつたにないが、その当時は小学校へ行く者も少なかったから、茂市さんが三年でやめて炭焼になつても、誰も不思議に思う者はいなかった。だが茂市さんは途中でやめたのがくやくして、学校を卒業した者より、もっと字がよめるようになろうと思つた。茂市さんの先祖は平家の残党で、源平の戦に負けてから三次の奥の山の中にひそみ、何代か前に、川の工事の賦役に出て、誰も動かせない大岩を一人で押し上げて堰の土台を築いたので、その功勞を認められて、紋と名字と賦役免除の資格をもらつたのだそう。それは大変な格式で、徳川の末まで威張つていられたのだが、茂市さんの父親は百姓が嫌いで、先祖代々の家も田畑も弟に譲り、自分は石工になつて歩き、家柄の自慢だけを妻に残して早く死んだ。茂市さんは小さい時から喧嘩に負けて帰る度びに、母親から先祖の話を聞かされて、負けず嫌いの心を養われていた。それに彼が十四の年の九月には、笠岡と福山の間に汽車が開通した。その十月には福山から尾道の間が開通した。十五の年の五月には糸崎から広島の間が開通した。茂市さんはまだみたことのない汽車が、文明をのせて、どんな自分の方へせまってくるような気がして、

「善ヲ見テ習ヒ不善ヲ見テ改ム、善ト不善ミナ我ガ師ナリ」

とか

「馬ハ早く走ルモノナレドモ勤メズシテハ遠キニ至ルコトアタハズ、牛ハ歩ミノ遅キモノナレドモ怠ラザル時ハ千里ノ遠キニ達スベシ、人学バザレバ道に達スルコトアタハズ」

とか、草を刈りながらでも、炭を焼きながらでも、ちゅうに覚えて口ずさみ、土の上にその字

を書いて覚え、十六歳になった時、郵便集配人の試験を受けた。

当時の集配人の採用規程は第一に、十五歳以上四十五歳以下の男子で、身元が正しく性質が実直な者。第二に、身体が強く走るのが上手な者。第三に、郵便物や電報の表書を読むことができる者。第四に普通の手紙文ぐらい読める者と、かなりむずかしい条件がいった。だから学校へ通わぬ者も沢山いたその頃のセキさんの村では、茂市さんが集配人に採用されると、

「茂市は字が読め字が書いて、村一番に足が早いそうな」と、評判になり、

「茂市はええことをする、年に冬服一組、夏服二組、笠二つ、合羽二枚、おかみからさがるそうな」

と、羨ましがられた。

セキさんが茂市さんを知ったのは、茂市さんが郵便集配人になった年だった。セキさんはその頃、ナナシキという家の女中をしていた。ナナシキは大地主で、地上にみえる財産もはかり知れないが、地下にかくされた財産もはかり知れない。それは朝日輝く三本杉のもとに埋めてあるといい伝えられていた。朝日輝く三本杉はどこにあるのか知っている者はいなかったが、セキさん達はどこかにそれがあるように信じて、ナナシキの旦那を殿様か何かのようにあがめていた。ナナシキの旦那が、いざどこかへ出るとなると、近所の一軒残らずから一人ずつのお供が出て、籠をかついだり荷物をかついだりして荷次所まで送って出た。旦那は荷次所の道端の茶店に腰をかけて、着て出た道中着をぬぎかえ、

「これを帰るまでに洗っとけ」

と、店の小娘にいいつける。ナナシキの小作人でもなんでもない茶店の小娘は、

「へい、洗わしていただきやす」

と、かしこまって、旦那のお帰りまでに洗っておかねばならない。もしも洗い方が気に入らぬと、

「こんな洗い方で着られるか、気をつけえ」

と、旦那に叱られる。そうすると茶店の親子は一文の洗い賃をもらうわけでもないのに、手をついて平あやまりに、あやまらねばならなかった。そのくらいだからナナシキの女中の中には、旦那にむりに子種^{こね}を宿されて、奥様にせっかんされ、井戸端^{いど}のざくろの木に首をくくって死んだ者さえいる。セキさんの親達は山も十町ばかり持っている一町百姓で、先祖は尼子^{あまこ}の家臣^{かしん}だったと家柄自慢をする人達で、セキさんはその親達が行儀^{ぎようぎ}みならいのために住みこませた奉公人^{ほうこうにん}だったけれども、十二の年から奉公して、死ぬより道のないような人々の苦しみをみて来たから、旦那が、

「セキよ、お前は色白じゃのう」

と、手を引っぱったり、

「お前の髪はすなおなのう」

と、頭をなでたりするのが、みぶるいするほどいやだった。そして旦那からそんなことをされないように、顔にはいつも鍋炭^{なべすすみ}をつけ、頭には手拭^{てぬぐい}をかぶり、井戸端のざくろの木のあたりでは

かり働いていた。その頃、茂市さんは郵便物をナナシキの屋敷へとどけに来ては、ざくろの木陰の井戸の水を釣って飲んで行くのが癖だった。

彼は網代笠に紺木綿を蔽うた集配人の笠をかぶっていた。その笠にはまっかなラシャで「下」の字が縫いつけてあった。紺の小倉の上着も袖口のところ、まっかなラシャの「下」の字が縫いつけてあった。雨の降る日には黒の桐油の合羽を着て来たが、これにもまっかな「下」の字が染めてあった。それはセキさんの目にしみこむようにうつった。彼は、

「郵便じゃー 早いじゃー」

と、飛ぶように軽々と走った。セキさんにはその声が耳底にいつまでも残った。彼は毎日外を歩くから顔の色が淡紙色にこげ、そつ齒の口をいつも尖らせてつむっていた。けれどセキさんの炭のついた顔をみては、齒を出して笑った。セキさんは笑われると耳まで赤くなりながら、やがて毎日茂市さんを待つようになった。洗濯をしていて、背中の方がむずがゆいような気がするの、後を向いてみると茂市さんが、山道でとったイチゴを持って立っていることもあった。病気で餅のようにふくれた、つつじの葉の枝を持って立っていることもあった。そのつつじの葉は甘酢っぱくておいしいのだ。セキさんは赤くなり、茂市さんはいよいよ口をとがらせて、何もいわずにその枝を、井戸の井げたの上に置いて帰った。

明治二十七年、セキさんが十五になると、いくら鍋炭はつけていても、べっぴんだという評判で、降るような縁談があった。けれどもセキさんは行こうとしなかった。夜なべ仕事の時にでも下男たちが、

「茂市はなかなかできがええ、月給袋は封を切らずに母親へ出すそうな、むだ使いもせんが、おうちやくもせん。配達がすんだらまっすぐに家へ帰って、服を着かえたと思うたら、もう肥をかつぎに出るそうな、感心な者じゃ、今に身代をこしらえるぞ」

などと話していると、つい耳を澄して聞いていた。この年は五月には霜が降り雪が降り、夏は旱害で米のできが悪かった上に、日清戦争で九月には平壤が落ちたと伝わり、黄海の大勝利が伝わり、十月は大東溝の占領だ、十一月は大連だ旅順だと、この山間僻地も、毎日戦争の知らせで、去年まで一升三錢五厘だったこら辺の米の相場も、六錢ぐらいに上って来た。それにつれて麦もくまごも上って、大体米の三分の一の値段で買えるくまごが一升二錢五厘もするようになって、「こう物が高くなっちゃあ、月給取りも困ろうじゃないか」

と、ナナシキの下男達は話していた。それを聞くとセキさんは、月給を頼りに暮す茂市さんのことが心配だった。

茂市さんの勤めていた郵便局では、茂市さんを十等の七級で採用し、三円の月給を払ったことにして、領収書に印を押させたけれども、本当には半分もくれなかった。半年たつと十等の六級に昇給させて三円二十五錢の領収書に印をおさせた。けれども本当には一錢も昇給していなかった。それは集配人の給料だけではない、逋送人の給料も、書記の給料もみなそのようにごまかして、逋送省からおりる手当を横取りしていた。茂市さんは当然自分がもらうべきものを横取りされていると思うと腹が立って、会計検査が来た時に、逋送人といっしょになって、このことを訴えた。

ところが会計検査人は、

「どこの局もみんなそうだ」

と、相手にしなかった。

「そんなら自分達はどこをごまかすんか」

と聞いたら、会計検査人は、

「ここの者はくまごで暮すんだから、町の三分の一でも生きて行けよう」

といった。雨の降る日も雪の降る日も、人里離れた奥山道を、走り歩いて勤めても、それは町の集配人の三分の一の給料にしかならないで、三分の二は郵便局長を肥ふとらせるのかと思うと、若い茂市さんは馬鹿らしくて、郵便集配人をする気がしなくなって来た。

茂市さんは何か働きたいのある仕事はないかとあたりをみまわした。隣村には明治二十年、彼がまだ小学校に通う頃、県道が開通して、そのあくる年から、この道を荷車が通るようになっていた。最初の荷車は押し車といって、後に一本の棒をつけ、棒を押して歩く車だったが、それでは沢山の荷を積んで梶かじを取る事が出来ないで、二三年たつと引き車になった。この頃米一升の値段が三錢五厘で、布野ふのから赤名あかなへ五里の道を、一日一台の荷車が往復すると、一円の駄賃だちんになった。そうすると一日で三斗俵一俵の米が買えるというので、元氣のいい青年は目をみはったが、三斗俵一俵が一円の時、荷車一台六円では、ちょっと手が出ない。上布野かみふのに石州せきしゅうの荷物を扱う問屋とんやがあつて、自分は車を引かないのだが、荷車を何台か持つて、引きたい者には貸していた。茂市さんはそこへ行つて、荷車をかりて引こうかと思つたが、しらべてみると、水上げの半分は

車の借り賃に取られるということがわかつて、これも考えさせられた。金をためて、荷物運送のはげしい道端^{みちばた}に家を持ち、荷車何台か持った問屋になるんだと、問屋の夢を描いて茂市さんは、月給はもらってもそれには手をつけず、家へ帰ると服のボタンをはずすのも、もどかしいほどいそいで、ぼろ着物に着かえ、人の嫌う肥^{こえ}かつぎなどに雇われて、親子が食べるくまご代ぐらいは稼ぎ出し、隣村へ家を持つ準備をした。

セキさんが十六歳の春、茂市さんは隣村に家を買った。それは道端でもなし、十坪ばかりのあら屋だった。

「あの家を買ってどうするんだろう、まさか郵便屋をやめはすまいが」と、ナナシキの下男も女中も、我がことのように心配した。そのうち茂市さんは荷車を一台買った。

「やったのう、あの若さで家を買った。荷車も買った。こんどは三次通いの荷車引きになるそうな、またも人の二倍三倍かせぐ気だろうか」

と、人々は噂^{うわさ}しあつた。セキさんはそれを聞くと、たとえ往復十里の荷車引きでもよい、あの人といっしょに暮^くりたいと思つた。茂市さんは郵便配達をやめると、セキさんをナナシキの裏門のところへ呼び出して、

「おまえ、わしと連れなう気があるか」

と聞いた。セキさんは心の底でうれしかったが、それを口にすることができなかった。

「いやならかぶりを振ってくれ、えけりやあうなずいてくれ」

セキさんは大きくうなずいた。だが親は許すはずがない。セキさんが茂市さんのことを相談に帰ると、

「田地の一畝ひとせもないような者と、いつしよになつてくれては、あとの娘の縁談にさわる。たつてそうというのなら勘当かんとうじゃ、今日限り親でもない子でもない」

と、頭から反対だった。セキさんは親とは勘当の泣きわかれ、五年の間、鍋炭をつけて働いたナナシキの主人からは、

「今日限り金親かなおや金子の縁も切る」

と叱られた。金親金子の縁というのは、主従しゅじゆうの関係とでもいうのか、親子でもないのに親子の契約をかわした間柄あいだからで、金子が結婚でもする時は、たいてい金親が親の代りになって、着物の少しぐらいは作ってやるのが普通だった。だが金親のナナシキの旦那から縁を切られたセキさんは、誰のみおくりもなしに、ふろしき包一つ負うて茂市さんのところへ嫁よめいだ。はじめて十坪の家の入口に立った時、茂市さんは、

「よう来てくれた」

と、一口よろこんでみせたが、母親を引きあわせる時には、

「わしにつかえる気があったら、この母親に孝行してくれ、お母に気に入られなんだら、いつしよにはおれんからのう」

といった。

山陰さんいんと山陽さんようとの分水嶺ぶんすいれいの近くにある赤名あかなは、儲け仕事もちけしごとが少ないからかもしれないが、この頃か

ら女も荷車を引くようになり、男といっしょに荷車を引いて、赤名峠^{とらうげ}を越え、上布野^{かみふの}の間屋へ向けておりてくる女がいた。姑^{しゅうと}はそれを見ると、

「うちの嫁^{よめ}も、赤名の女ご衆のように、亭主^{ていしゅ}といっしょに荷車あ引かそう、そうでもしなけりや、とても身代^{しんだい}はできん」

といいだした。それで茂市さんは三次の炭屋で借錢をして、もう一台荷車を買ひ、セキさんも荷車を引くようにさせた。口に出してはいわなくとも、心の底で愛していればこそ、親の勤当も人のそしりもとわずに、飛びこんで来た貧乏世帯なのに、苦勞を共にしようと思えばこそ、夫が百二三十貫の荷物を引けば、せめて自分は六七十貫の荷を引こうと、油汗を流して五里の山道を荷車を引いて下って行くのに、姑は茂市さんの弁当ごうりには、米のごはんばかりつめ、セキさんの弁当ごうりにはくまご飯ばかりつめ、

「茂市や、残ったら持ってもどれよ」

といった。その弁当もある日、人のいない道端で、夫婦二人ならんで食べる時、

「あんた、一箸^{ひとはし}くれてならええ」

と、セキさんがいったら、茂市さんは、

「お母が残ったら持ってもどれいうた」

と、セキさんの方は見むきもせずに食べた。セキさんはこの時、

「あーあ、身代をためるような男に、やさしゅうしてもらおう思うたのが、まちがいじゃった」
と、涙の降りかかるくまご飯をのみこんだ。

巡 礼

食うことも眠ることも、何もかも夫とはずっと悪い待遇でも、セキさんは何も言わずに夫といっしょに荷車を引きつつ、やがて子供を産んだ。子供は女の子だった。女の子だからよけいにそうであつたのかもしれないが、茂市さんは子供が生まれたと言つても、にっこりともせず、人から喜びを言われると、

「女ごの子じゃあ楽しみがなあでのう！」

と言つた。そして出産して三十三日目、女の体が元どおりに帰ると言う日を、どんなに待ちあぐんだことだろう。セキさんは子供を産んで十日目から起きて、縫いものなどはしたが、我が子のために我が命を惜しんで、三十三日間はどうしても荷車を引くまいとした。だが十四日がすぎると姑は、

「わしらは十四日目から山仕事に行つた。いまの女ごは男が甘いけええこつちや、楽なこつちや」

ときげんが悪くなった。二十一日がすぎると茂市さんは、もうがまんが出来ないのか、三つ星が頭のま上にある頃（ま夜半）から、セキさんを誘い起して荷車の仕度を手つたわせ、

「ちいと（少し）でもええ、引っぱって出んか」

と、セキさんの荷車へも炭俵を積もうとした。セキさんは勇気を出して、

「三十三日目の宮参りがすまん間は、道の神さんの罰があたろうじゃあがんせんか」とことわって、ともかく三十三日体をいたわった。いよいよ三十三日目の宮参りがすんだ。三つ星の輝く下で茂市さんはセキさんの荷車へ、一番軽い十一貫の炭を五俵も積み上げた。セキさんは子供のおむつを取りかえ、乳をのませて、

「ええ子をして待つとれよ」

と、一日の別れをおしんだ。子供はそれがわかるのか、ゴヤーゴヤーと泣き立てた。

日がな一日荷車を引くセキさんの赤ん坊は、泣いても泣いても抱いてはもらえなかった。土間で炭俵を編む姑は、孫が死ぬほど泣いても、抱こうとはしない。

「泣くたんびに抱きよって仕事ができるか、泣け泣け、なんぼうないと泣け」

といって、セキさんが頼んで出た乳のかわりの重湯おもゆをのませる時間さえおしんで、おむつなどかえてはくれなかった。だから赤ん坊は、十時間もその上もおしっことうんことによごれたおむつに包まれて泣きとおした。荷車はコロコロ、コロコロとやさしい音をたてて、セキさんの心を慰めてくれたけれど、セキさんの心はそれで慰まらなかった。

「ツルよー、ツルよー」

と、わが子の名を呼びながら荷車を引っぱった。乳がはってきて、道端の草の葉に乳をしぼる時にも、

「ツルよー、ツルよー、ツルは塗りっこ塗ったで、泣いとうろがのうー」

と泣いた。だが茂市さんはその小さい者の命を可愛そうに言ったことはなかった。